スカーレット像

橋　本　裕　美

『風と共に去りぬ』という作品を通して、私たちはスカーレット・オハラという女性の生涯の一部を、垣間見ることができます。今なお世界中で愛され続けるこの不朽の名作の主人公スカーレットとは、一体どんな人物なのでしょうか。

私たちの知りうる限りにおいて、彼女は3度の結婚をしました。これは、現在私たちがもつ結婚観、そして当時の淑女がもっていたであろう結婚観と比べてみても、特異なものだと思います。1度目の結婚は、アシュレに振られた腹いせでの、チャールズとの当て付け婚でした。何とも浅はかな行動に幼なさが感じられますが、その気位の高さはすでに一人前の女性であることを感じさせます。2度目の結婚は、終戦後タラに多額の税金がかかり、そのお金を工面するための、フランクとの税金対策婚でした。このことから、自分の目的を達成するためには手段を選ばない利己主義と思われがちですが、そこには目前の問題の本質を見抜き、それに対処していくことのできる力強さが感じられます。また、スカーレットのタラに対する強い愛着と、2度とひもじい思いはしないと誓った飢えとの訣別への執着がうかがえます。立派に事業を経営し、男以上の仕事をやってのけることは、当時の淑女には考えられないことで、一方現代女性にとっては当然であることからも、彼女の革新的な姿を知ることができます。3度目のレットとの結婚では、物質的な満足を追い求めるあまり、一番大切にすべきことが見えなくなってしまいますが、メラニーの死に直面し、全てを悟ります。

このように、彼女は3度の結婚を通じて変化し、成長していくのです。その過程でいつも感心するのは、彼女がどんな時も自分にとって最もよいと思われる決断をし、あらゆる苦難を乗りこえ、失われた幸せを取り戻すため、まだ見ぬ幸せのために力の限り戦い、人生を切り開いていく姿勢です。そこには、生命の息吹が感じられます。スカーレットの強さの秘訣は、まず彼女が自分自身に対していつでも正直であるということです。常識や淑女たるものはこうあるべきといった古い秩序のしがらみにとらわれることなく、自分の納得のいく道を歩むことこそが、彼女に勇気と自信を与えるのだと思います。さらに、彼女が現実や運命をしっかりと見据え、それらを全て受けとめているということです。このため、それまでの生活を一変させるような事態に陥っても、それに押し流されるのでなく、たとえ手探りの状態であっても前へと踏み出していけるのです。

こうして彼女を知るほどに、いつの時代の人々も時折みせる彼女の弱さに共感し、親近感を覚え、また波乱万丈の人生をまさしく天真爛漫に生き抜く彼女の姿に、羨望の眼差しを向けることとなるのです。

(指導教員　中村　敦志)